大河原の三文人

俳諧・詩・短歌
―時代を超えて愛される郷土の文学者たち

仙台藩を代表する俳人の一人だった村井江三、独自の作風で現在でも根強いファンが多い尾形亀之助、昭和を代表する歌人佐藤佐太郎の三人はわが町を代表する文人ですが、大河原町出身ということ以外、町民の間でもその業績や生涯についてあまり知られていないようです。

7月19日から23日まで、中央公民館で、この三人を顕彰する「文人展」が開かれました（6ページ「まちのわだい」にも掲載）。展示された資料から、三文人の生涯をご紹介したいと思います。

村井江三

江三の俳画に描かれた自画像

寛政8（1796）年、大河原宿の本町生まれ。名は兵治。「一日庵江三（こうさん）」と号す。寺子屋を開き、俳諧を志して諸国行脚、帰郷後は後進の指導にあたった。「筆塚集」「はなかたみ」等の句集がある。明治3（1870）年没。

一日庵村井江三は、少年の頃から学を好み、俳聖と呼ばれた松尾芭蕉を崇敬し続けました。

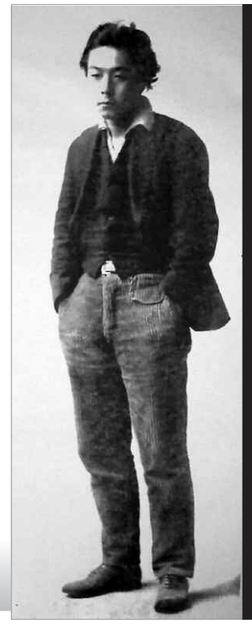
20歳頃から寺子屋を聞き、25歳頃から諸国に吟行の旅を続け、文人墨客と交わり修行しました。山形、会津から羽後をかけて江戸や京都に遊び、大河原に帰郷してからは、山形や上山を始め各地の句会に招かれ、その判者となるとともに藩内外の多数の同好者を指導しました。

天保から安政年間（19世紀中盤）にかけては藩内俳壇の一方の旗頭でした。大河原の俳諧は江三という俳匠を得て花開き、実を結んだといえるでしょう。

晩年は、隣家の2階に間借りするなど物質的には貧しい生活を送りました。死期を悟った江三は、辞世の句を作り自分で墓碑銘を書いています。

七十年来如一夢
幸や此年の花も見つくして　七十八
とうとうに死ぬ節来たり若葉山　一日庵江三一舟居士

尾形亀之助



明治33（1900）年、大河原町の本町生まれ。小学生の時に仙台に移り、東北学院中学在学中から短歌や詩を発表。「月曜」などの詩誌を主宰した。詩集「色ガラスの街」「雨になる朝」「障子のある家」を遺す。昭和17（1942）年没。

大地主の家に生まれた尾形亀之助は、学業もそこそこに石原純、原阿佐緒らの「玄土（げんど）」に参加して短歌を発表する一方、未来派美術の画家として作品を製作、また、前衛美術集団「マヴォ」を結成し、ジャンルを超えた創作を展開しました。

亀之助は生涯にわたってほぼ定職を持たず、実家からの仕送りで生活しながら芸術に没頭する人生を送りました。晩年は実家の没落により、貧困と病苦に悩まされ、失意の日々を過ごしました。

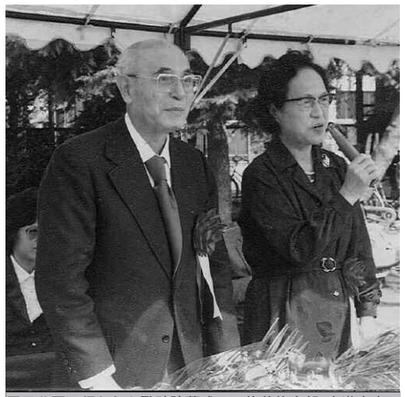
昭和17年12月、国分町の道端で倒れているのを発見され、翌日看取る人がいないまま亡くなりました。

「秋」

円い山の上に旗が立っている。
空はよく晴れわたって
子供等の歌が聞こえてくる
紅葉を折って帰る人は
乾いた路を歩いてくる
秋は　綺麗にみがいたガラスの中です。

（第一詩集「色ガラスの街」より）

佐藤佐太郎


甲子公園で行われた歌碑除幕式での佐藤佐太郎・志満夫妻

明治42（1909）年、大河原町福田生まれ。歌誌「歩道」を主宰、作歌活動のかたわら多くの歌人を育てた。昭和28年毎日新聞歌壇選者、昭和42年から昭和53年まで宮中歌会始選者、昭和58年日本芸術院会員。昭和62（1987）年没。

佐藤佐太郎は、高等小学校を卒業した翌年、東京の岩波書店に勤め、その後短歌誌「アララギ」で作歌活動を始めています。そこで中心人物だった斎藤茂吉に師事し、若手歌人として頭角を現します。

昭和27年出版の第五歌集「帰潮」は、当初よりその評価は高く、同年読売文学賞を受けました。平成元年に短歌新聞社が募集した「あなたが選ぶ百冊の歌集」にも、師の斎藤茂吉のほか石川啄木や北原白秋などを抑え「帰潮」が第一位に選ばれています。このほか現代短歌大賞、日本芸術院賞などを次々と受賞、美智子皇后（当時皇太子妃）の作歌指導や宮中歌会始選者を務めるなど、歌壇の第一人者として重きをなしました。

大河原での思い出を佐太郎は「郷里のことはほとんど私の記憶にない。鍋釜を沈めた池があったこと、木小屋の前に栗の実が落ちていたその土の匂いくらいしか覚えていない」と語っています。

大河原町に住んでいたのは3歳頃までで、幼い記憶しかないという佐太郎ですが、常に故郷を懐かしみ、その思いを歌に表しています。

生あたたかき桑の実はむと桑畑に幼きころはよくあそびけり

かなしみに思ふとなけれ家址（いえあと）は記憶より低しけふ来てみれば

昭和57年10月、甲子公園で、佐太郎夫妻同席のもと歌碑建立の除幕式が行われました。その歌碑には

生れしより六十年か低山の上に　蔵王の残雪光る

の歌が刻まれています。

三人のことをもっと知りたくなったら…

ここにご紹介したのは、彼らの生涯や業績にまつわるエピソードのほんの一部です。

中央公民館には遺品や直筆色紙など、貴重な資料が展示されています。

また、駅前図書館には本人の著作や研究者の評論、伝記や小説など（村井江三は郷土資料のみ）多数の資料があります。

興味を持たれたかたは、ぜひ、ご覧ください。

㊐中央公民館　☎53-4050
駅前図書館　☎51-3330